

核兵器で平和は実現できない ～ロシアのウクライナ侵攻は世界に何を証明したのか～

瓜生田 秀徳

2022年2月、ロシアがウクライナに侵攻した。この許されざる暴挙を、私は職場で昼休みに知った。21世紀に入ってもなお、戦争はまだなくなることなく続いている。国際平和の維持とはかくも難しいのか、と改めて思った。当初多くの人が予想していた最悪の結末を迎えることなく、現在に至るまでウクライナは抵抗を続けている。一方でロシア側は核兵器による攻撃を示唆しており、国際社会から批判されている。おそらくロシアは最終手段として核兵器を使うのだろう。

第二次世界大戦中、アメリカが初めての核実験を実施し、広島・長崎に原爆を投下したことで「核兵器」は初めて歴史の表舞台に立った。戦後、戦勝国を中心に様々な国が核実験に成功し、核兵器を大量に製造した。その結果として1980年代まで核兵器は増え続けたものの、1990年代以降は減少している。それでも未だに1万発以上の核兵器が存在し、そのほとんどは米露両国が保有している。この事実は戦後から冷戦期を経て現在に至るまで、両国の対立はまだ続いていることを物語っている。だが第二次世界大戦以降、この二国が直接的・軍事的衝突を起こしていないことを考えると、核兵器の抑止力としての役割を全否定はできないだろう。

しかしこれから先も核に依存した平和の維持は可能なのだろうか？広島・長崎に落とされた原爆の脅威は世界中にその恐ろしさを見せつけた。核兵器を使用することでもたらされる惨劇、一般市民の耐えがたい苦痛、そして長く続く放射能汚染との闘い。これ以上の悲劇を繰り返さないためにも核使用のデメリットを直視しながら、「抑止力としての核」に依存しながら戦争を避けてきたのではないか。その抑止力は人類を消滅させることのできる強大な力があり、自分達が使えば敵から報復のために核による攻撃を受け、その連鎖が止まらなければ世界中で甚大な被害が出ることになるだろう。そうなれば人類の歴史は終わりを迎えることになる。世界終末時計の指し示す秒針が現実となるのにそう時間はかからないのかもしれない。

今、そのような危機の中に我々は生きている。もし侵攻が失敗に終わりそうな状況になった時、果たしてロシアはそれを受け入れてウクライナからおとなしく手を引くのだろうか？前述したように、ロシアは核兵器を最終手段として使用するのではないだろうか。そうなれば、報復のための核使用も十分に考えられる。こうなるともう核の抑止力としての機能を失うことになるだろう。核の存在意義は一度使われてしまえば脆く崩れ去ってしまうのだ。核兵器の抑止力としての機能を維持するためには、使用されないことが大きな条件になるのではないか。そのためには核保有国のリーダーが良識ある人間でなければならぬし、かつ平和を希求する意欲のある者でなくては行けない。だが常にそうした人間がリーダーになるわけではない。それは現在の状況を知る我々が今、もっとも痛感していることなのではないか。人間は完璧ではない。その前提に立てば、人類は核兵器を持つべきではないという結論を導くのは容易ではないだろうか。

核兵器は、いや、この世に存在するありとあらゆる武器や兵器は地球を守ることなどで

ない。ロシアのウクライナ侵攻で証明されたのは、「核の抑止力としての機能神話」の崩壊であり、世界平和のための核兵器の存在意義は失われつつあるということだ。それでは今後、地球に生きる我々は平和を実現・維持するためにどうすべきなのだろうか。その答えはいたってシンプルで、私は今後も被爆者の体験を世界中の人達へ発信し続けることが国際平和につながると考えている。被爆者やその子孫といった語り部の方々の活動や原爆資料館の展示によって、原爆の恐ろしさは世界中の人に伝わっている。また政府の尽力により、2016年にアメリカのオバマ大統領が現職の米大統領として広島を初訪問し、また今年のG7サミットでは参加国の首脳らが原爆慰霊碑に献花を行ったのである。着実に、世界の人々へ戦争の残虐性や愚かさを伝えていけているのである。

核兵器は確かに抑止力としての機能を担っている。だが、その機能はいつまで続くか分からない。なぜならば核は人類を滅ぼしかねない力を有しているからだ。そのような力を、感情で動く人類が管理している。その時の国際情勢次第で、人類はその手で自らを滅ぼしてしまう可能性がある。「人類の核による自殺」が行われるのを阻止するために、我々は国際社会に核の恐ろしさを引き続き強く訴え続けていくべきなのである。